

年 代	石 川 門	橋 爪 門	河 北 門
天正・文禄期 (1573-1596)	天正期に創建か		河北坂下に外枳形の城門設置か
慶長前期 (-1605)			坂上に平入門を設置
慶長後期 (1605-)	現在と反対の 左折れ内枳形の城門		坂上に内枳形の城門を設置
寛永8年～10年 (1631-33)	寛永の大火で焼失	二ノ丸拡張に伴って創建	この頃までにニラミ櫓も 備えた枳形門が完成
時期不明	再建（現在と同じ 右折れ内枳形に変更か）		
寛文～元禄 (1661-1704)	（絵図に明確な枳形門として 描かれる）	（絵図に明確な枳形門として 描かれる）	改修
宝暦9年 (1759)	宝暦の大火で焼失	宝暦の大火で焼失	宝暦の大火で焼失
宝暦12年 (1762)		門ならびに番所再建か	石垣台の修理完成
明和9年 (1772)			再建
天明8年 (1788)	再建	橋爪門続櫓を再建	
寛政11年 (1799)	地震により被災	（この頃までに橋爪門 全体が再建）	
享和元年 (1801)	石垣の修理 （石川櫓を一時撤去）		
文化2～3年 (1805-6)	石垣の修理		
文化5年 (1808)		文化の二ノ丸火災で焼失	
文化6年 (1809)	この頃までに櫓下の 石垣修理	再建	
文化11年 (1814)	石川櫓を復旧		
弘化5年 (1848)	右方太鼓塀を修理		
明治14年 (1881)		失火により焼失	
明治15年頃 (1882)			解体撤去
明治16年 (1883)	屋根の修理	三御門周辺の鳥瞰図(江戸後期)	
明治24年 (1891)	屋根の修理		
大正15年 (1926)	屋根の修理		
昭和5年 (1930)	屋根の修理		
昭和10年 (1935)	国宝保存法により 旧国宝に指定		
昭和18年 (1943)	窓にガラス戸設置		
昭和25年 (1950)	文化財保護法施行により 国指定重要文化財に移行		
昭和26年 (1951)	屋根の修理		
昭和28～34年 (1953-9)	解体による大修理		
昭和55年 (1980)	屋根の修理		
平成18年 (2006)	平成の修理開始 (25年度完了予定)		

金沢城を探る

金沢城の三御門



石川門



河北門



橋爪門

金沢城跡には、かつて多くの城門があった。その中でも二ノ丸の正門とされる橋爪門、三ノ丸の正門とされる河北門、三ノ丸の搦手筋の石川門は三御門と呼ばれ、とくに重要な門として、通行にあたっての規制がかけられた。三御門は、いずれも枳形門と呼ばれる形式が採用されており、その建造物としての特徴を紹介したい。

三御門の形式を比べる

三御門はいずれも、城門のなかでも最も堅固とされる「枅形門」という形式で作られています。

※「ます」の字には、「柵」・「升」等の文字が使われることもあります。

枅形門模式図(石川門)

枅形門は、城外側と城内側の 2 つの門の間を、
 真っ直ぐ通過できないようにした城門の形式で、2
 つの門と城壁等で囲ってできる四角形の空間が、
 「枅」の形に似ていたことから、「枅形」と呼んだこ
 とに由来します。

なかでも石川門は、高麗門(表側の小さな門、一ノ門)と櫓門(城内側の大きな門、二ノ門)の間を、L字型の多間櫓(一層の長屋状の櫓)でつなぎ、さらに高麗門脇には二重櫓を備えた究極の枅形門です。

現在、江戸時代の姿を完全な形で遺している枳形門は、大阪城大手門と金沢城石川門の2つしかありません。



河北門

「隠し石垣」土堀



橋爪門

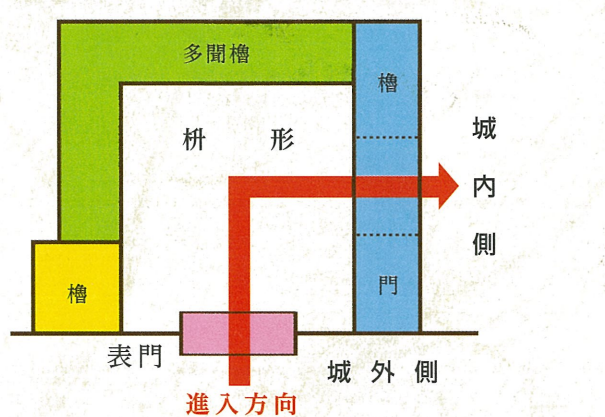
土堀

同じ桁形門の河北門や橋爪門では、建物・土塀の配列や意匠が石川門とは異なっており、それぞれ個性が見られます。

図示したように、L字型の多聞櫓ではなく、工夫を加えた土塀などになっています。

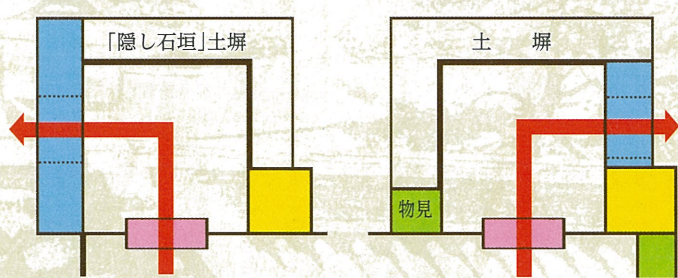
※「ます」の字には、「桧」・「升」等の文字が使われることもあります。

枅形門模式図(石川門)



河北門 橋爪門

橋爪門



三御門の大きさを比べる

		橋 爪 門	河 北 門	石 川 門
枅 形	長 辺 長 さ	23.0m	18.2m	17.7 ~ 18.9m
	短 辺 長 さ	19.1 ~ 22.4m	14.6m	15.1m
一ノ門	門 の 幅	5.7m	5.2m	4.7m
二ノ門	門部分の幅	10.7m	11.5m	10.4m
	櫓の長辺長さ	14.6m	27.2m	25.2m
三重又は 二重櫓台	長 辺 長 さ	10.4m	11.1 ~ 11.8m	9.9m
	短 辺 長 さ	10.4m	7.4 ~ 7.8m	8.6m

河北門・石川門・橋爪門続櫓台の寸法は現況値であり、橋爪門の桁形等は「御城中書分墓絵図」の寸法によった。

上の表は、江戸末期に実際に三御門が、そろって建っていた当時の大きさを比較したものです。

最も格式の高い橋爪門が、桁形の内法面積や一ノ門の幅が最も大きく、門脇の櫓も橋爪門だけが三重櫓(橋爪門続櫓)でした。二ノ丸御殿の入口にふさわしい城門といえます。しかし一見、櫓門(二ノ門)の規模は小さく見えます。それは、石川門や河北門のような袖石垣を伴う形式ではないからです。

石川門と河北門はほぼ同じ規模ですが、桁形の大きさは石川門の方が、櫓門の規模は河北門の方が、それぞれわずかに大きく造られています。

明治11年の河北門・橋爪門の写真



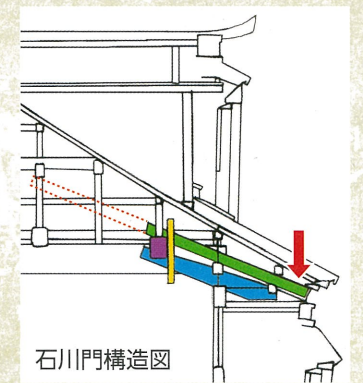
明治 11 年 10 月 4 日、明治天皇は金沢城を巡幸しています。巡幸に同行した写真師は、行く先々で写真撮影を行いました。この写真もその 1 枚であり、撮影年月が明治 11 年と確実に判明している点で、貴重な金沢城の写真です。

河北門の復元では、河北門の枡形内側の石垣高さ等の推測にこの写真が使われています。写真解析技術の応用により、撮影ポイント等を推測し、枡形内側の石垣の高さなどの実際の寸法を算出しました。

これ知ってる？



河北門写真



石川門構造図

枰（枰木）

石川門や河北門の櫓門 2 階内部の妻側の壁（短辺方向の壁）の上の方をよく見てみよう。

力垂木（右図の緑色の部材）が支える屋根の重さは、梁（紫色の部材）を支点にして反対側の端を跳ね上げようとします。

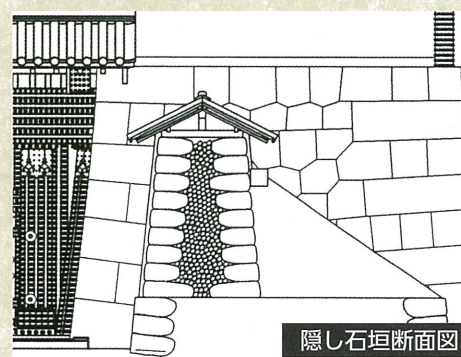
その力を、杵（黄色の部材）を使って下の腕木・登り木（青色の部材）に伝えることで、力垂木の点線部分は不要となり、木材を節約し、内部空間を広く使うことができます。

隠し石垣

河北門の桁形土塀は、全国的にも類例のない、珍しい工法が採用されています。後藤彦三郎という江戸後期の穴生の指摘によれば、土塀の中に「隠し石垣」が施工されているということです。

復元にあたり、この指摘に基づき、石垣の表面の仕上げは漆喰塗にし、石垣の上に土塀らしい屋根も設け「隠し石垣」を推定復元しています。

一般の土壁よりも、格段に仕上げが難しく、加賀藩の御壁塗の伝統を伝える左官職人の腕の見せ所でした。



隠し石垣断面図